

## スタディツアー報告

# 「足尾・渡良瀬河流域ツアーから学ぶ 足尾鉍毒事件の構造」

国際学部 高橋 若菜

2011年の福島原発事故は、多くの人々の避難をもたらし、人々の生活を根こそぎ損ね、甚大な社会的被害を引き起こしています。こうした問題を引き起こす社会的構造は、過去の環境災害と通底していると考えています。

環境破壊や犠牲をもたらす社会的構造を実感的に学んでほしい、その経験から感じ考えてほしい、そういう思いから、2013年より、足尾・渡良瀬におけるアクティブ・ラーニングを、授業カリキュラムに取り込みました。今年は、その3年目となります。昨年までは、問題関心を共有する国際学部の阪本公美子先生（「社会開発入門」）との合同企画でした（阪本先生編「足尾銅山鉍毒事件・水俣病事件・原発震災から学ぶ」、2014年10月を参照）。阪本先生による「社会開発入門」は時限付きの開講であったことから、今年からは、高橋による単独企画となりました。基盤教育「環境と国際社会」と国際学部「環境と国際協力演習」の合同授業として、2015年6月6-7日に実施しました。

足尾鉍毒事件は、日本の近代化と密接な関わりがあります。明治政府は、鎖国が解けてか

ら、産業革命を先んじた欧米列強に追いつき追い越せと、「殖産興業」と「富国強兵」を強力に押し進めます。この2大政策を、繊維産業や製鉄業などとともに支えたのが、鉍産業でした。銅はその要です。外貨獲得の手段としても、身の回りの様々な物品や戦争のための武器弾薬の材料としても不可欠な、貴重な原料だったのです。

1877年、実業家の古河市兵衛は、当時さびれていた足尾銅山を明治政府よりもらいうけ、足尾銅山の経営に乗り出します。その後、古河は、鉍脈を見つけ、水力発電や銅製錬などの近代技術の導入にも成功し、足尾を日本を代表する銅山に発展させました。銅の生産高が桁違いにあがり経営が順風満帆になるにつれて、古河財閥は急成長し、また地元の町は繁栄しました。当時の足尾の繁栄ぶりは、日本一の鉍都といわれるほどでした。

しかし、足尾銅山の発展は、多面的な環境破壊を伴いました。銅山の1200キロ余に及ぶ坑道に支柱が必要とされ、動力源としての薪炭も必要とされ、周辺森林で多くの木材が伐採され



## II 活動報告

ました。銅製錬所から流れ出る有毒な煙は、伐採され弱体化した木々を襲い、木々は枯れ、豊かな森林は禿げ山と化しました。吸水機能を失った急斜面からは表土がはぎ取られ、河川は土砂に埋まりました。煙は、山間を這い、牧歌的な生活が営まれていた農村にも到達しました。足尾上流の農村では、農作物が育たなくなり、生活の糧が奪われました。

足尾周辺だけではなく、足尾から流れ出す鉱毒は、渡良瀬川を下り、数十キロ下流域の肥沃な大地に注ぎ込みました。農作物が枯れ、健康や人命も損なわれ、住民たちは堪らずに立ち上がります。しかし、デモを起こした住民に、明治政府が送り込んだのは、憲兵たちでした。「真の文明は山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし」。田中正造は、銅山の操業停止を議会で訴えますが、国の基幹産業である銅の採掘がとまるはずありませんでした。足尾町にとっても、地元経済を潤してくれる銅山を操業停止することも考えられないことでした。古河財閥は、被害を受け立ち退きをする住民に些少の見舞い金を出します。明治政府は、鉱毒を沈殿させ東京方面に行かないようさせるために、渡良瀬流域の谷中村を廃村とし湖をつくる方針をたてます。しかし、わずかな見舞金で、先祖代々の土地を損ねる辱めを受けないと、田中正造を中心に、根強い住民運動も続きました。生き残りをかけて交錯する思惑のなかで、異なる立場の被害者たちは互いに反



目し分断されていきました。田中正造の死後、谷中村は滅亡し、渡良瀬遊水池が作られました。足尾上流の松木村は廃村となり、わずかな見舞金を手にした住民たちは、彼方に移住を余儀なくされました。

明治、大正、昭和期まで、足尾銅山の操業はそのまます十年続きます。第二次世界大戦期になると、炭坑労働の担い手として、中国人や韓国人らが強制移住させられました。彼らに多くの死者や行方不明者がでたことは、ここでも人権蹂躪があったことを物語っています。さらに時代を経て、足尾銅山では公害闘争がさかりの1973年に、採鉱が停止されました。足尾では急激に過疎化が進んでいます。一方、渡良瀬遊水池は、行楽地となり、二次的に再生された湿地は、豊かな生態系ゆえに、ラムサール条約登録されるまでになりました。しかし、そこに谷中村の豊かな生活の営みがあった痕跡は、河川敷の対岸にひっそりと立地する合同慰霊碑や、ハート形の遊水池のくぼんだ地域にかりうじて





保存された谷中村遺跡を偲ぶのみで、人々の目に触れることはあまりありません。松木溪谷には、無名の墓石が点在するのみで、山の斜面一面にはカラミが無造作に堆積しています。

「急峻な山間の地”足尾”と、肥沃な大地”渡良瀬流域”、この二つの地域の1世紀半にも及ぶ不幸な交錯の歴史から、この地には幾重にもいくんだ加害・被害/受益・受苦の構造があったことがみえてきます。授業では、事前学習により一定の知識を得て、問題関心を醸成した上で、1日目はまずは上流の足尾を、2日目は下流域の渡良瀬遊水地を歩きました。現場や現存する史料を見て、講師の方々のお話に耳をかたむけました。現地調査後は、印象に残ったことや感じたことを、授業でさらに話し合いました。フィールド・スタディを通じて、資料では得られない生の体験から、足尾鉍毒事件をめぐり環境や人々に多大な被害や犠牲があったこと、しかしそれらが経済成長や国の繁栄の陰で見えにくくなっている構図もみえてきました。こうした構図は、福島原発事故やグローバルな環境問題を巡る構造とも酷似しており、今日も変わらないという指摘もありました。「経済成長のためには犠牲も仕方がない」という論争的な意見もありましたが、「本当に仕方がないのか、否、被害や犠牲に向き合うべきだ」、「それがむしろ新たな社会開発・持続可能な発展の出発点となる」、との議論もありました。そうした議論を経て、理解を深めたうえで、学生た

ちはレポートを作成しました。

かつては東京と変わらない生活レベルと言われたという足尾の過疎化を目の当たりにする時、かつて豊かな生活が営まれていたはずの谷中村があった渡良瀬遊水地にただ葦原が広がる様を見渡す時、諸行無常、盛者必衰、、という方丈記の一節を思い浮かべずに入られません。しかし、その地には、あるいはその地を追われた人もまた別の地で、人生の営みは世代を超えて続きます。環境汚染物質は浄化されても、生態系は二次的に復元されても、人々の健康や人命は戻りません。同様に、人々の暮らしを支える生活基盤も文化や伝統も、一度損なわれれば、復元することは容易ではありません。だからこそ、日本を代表する環境社会学者の飯島伸子は、環境問題において「被害者の視点」「居住者の視点」「生活者の視点」をもつ重要性を謳っています。

環境災害では、往々にして弱者～子どもや高齢者、生活弱者、貧困者～に被害が集中しやすいといわれます。環境災害の犠牲者、被害者たちを、マイノリティであるとするならば、「文明はマイノリティの扱いによって判断される」というガンジーの名言を思い起こす時が来ているのではないか。もはや物質的には十二分に充足し、経済成長も右肩上がりではない現在、若い世代では価値観も変わりつつあるのではないか、学生の議論を聞きながら、レポートを読みながら、そのような希望を感じました。

アクティブ・ラーニングの企画と実施に際し、お世話になった全ての方々に御礼申し上げます。

